

大空 (生徒・保護者向け) 7号

宮崎県立宮崎西高校・宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校 校長通信

令和2年5月25日(月)

「新しい生活様式」の意味するもの

□本日の概要

- 学校再開について示された県の考え方は、「学校再開だからといって、学校全体の教育活動や生活が新型コロナウイルス感染症が発生する以前と同等に戻ることはない」というものである。
- したがって、新型コロナウイルス感染症対策を、これまでの生活様式に取り込んで、新型コロナウイルスと共に、生活や教育活動を展開していく必要がある。
- 「新しい生活様式」という言葉を形骸化させず、その真意を理解し、感染予防と日常生活のバランスを取りたい。
- 多くの人に支えられての現状がある。コロナ危機を通して新たな考え方を身につけて欲しい。

□「学校再開」についての考え方

本日25日より学校が再開しました。本校では20日の一斉登校日に、環境保健部長の寺澤先生から放送で「新しい生活様式」についてのお話がありました。また、21日の県からの通知を受けて、今後の本校の対応についてプリントを配布し、HP等にも掲載したところです。

県の通知文には、「教育活動については、『宮崎県立学校における新しい生活様式』の実践を通して、最大限に児童生徒の『学びの保障』に努めること」とあります。また、「新型コロナウイルス感染症については、学校における感染症拡大のリスクがなくなるものではなく、今後も社会全体が長期間にわたり、この新型コロナウイルス感染症とともに生きていかなければならないという認識に立ちつつ、子供たちの健やかな学びを保障することが必要となる。」という記載があります。これは要するに、「学校は再開するが、学校全体の教育活動や生活が新型コロナウイルス感染症が発生する以前と同等に戻ることはない

□山中伸弥教授の解説

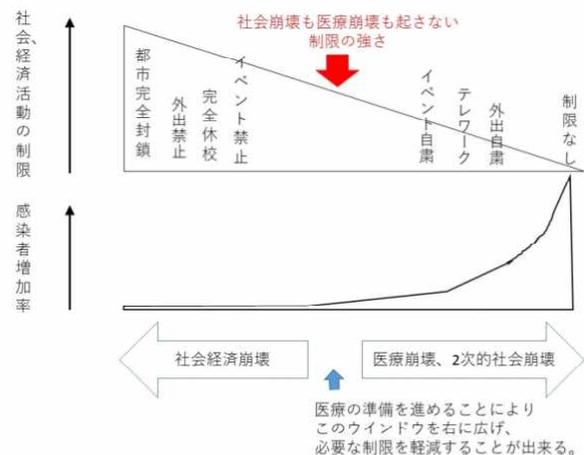
「新しい生活様式」は私たちの日々の感染症対策を示すキーワードですが、その「新しい生活様式」が必要とされる背景にある、「新型コロナウイルスと

ともに生きていかなければならないという認識」については、つい目を背けがちです。

ノーベル賞を受賞した山中伸弥教授は、感染症の専門家ではないと断りながらも、科学者の一人としてHPやマスコミ等で新型コロナウイルスについての情報を発信しています。その山中教授は、今は「ウイルスとの戦い」という言葉を使っていません。今、教授はHPでは「ウイルスとの共存」という言葉を使っています。これは「新型コロナウイルス感染症とともに生きていかなければならない」という認識と同じです。山中教授のHPは分かりやすいので紹介します。

今、求められる対策は？

ウイルスへの対策は、有効なワクチンや治療薬が開発されるまで手を抜くことなく続ける必要があります。1年以上かかるかもしれません。マラソンと同じで、飛ばし過ぎると途中で失速します。ゆっくり過ぎるとウイルスの勢いが増します。新型コロナウイルスは強力です。しかし、みんなが協力し賢く行動すれば、社会崩壊も医療崩壊も防ぐことが出来るはずです。今、私たちが新型コロナウイルスに試されています。私たちの団結力を見せつけなければなりません！



上の図は山中教授のHPに掲載されていたものです。図の左側のように、外出禁止や休校が長引けば、私たちの社会や経済、教育が崩壊します。かといって、図の右のように、制限なしの状態に戻せば医療崩壊に陥ります。「新しい生活様式」とは、感染防止のための様々な具体的な対策を指しますが、その背景にあるのは、図の中央にあるように、「社会崩壊も

医療崩壊も起こさない制限の強さ」のバランスが必要であるという考え方です。

口社会崩壊も医療崩壊も起こさない制限の強さ

このバランスは簡単ではありません。しかも、長続きしなければなりません。

どこにいても感染の危険はあります。しかし、不安だからと家に閉じこもっては、社会が崩壊します。また、どんな生活を送ろうとも、感染の可能性をゼロにすることは困難です。さらに、3月の休校のときのように、1ヶ月の我慢ではないのです。そのため、私たちは、「新しい生活様式」に示されたウイルス対策を、生活様式、つまり「歯磨き」のように日常の行為として身につけながら、学びや経済活動を推進し、社会を維持していくということを長期間維持しなければならないのです。

これは不可能ではないと思います。この5月の緊急事態宣言の時でも、日本は諸外国に見られるロックアウトのような強行手段はとらずに、自粛をベースに感染者を抑えました。この成果の分析は専門家に任せますが、私たちが日常の感染防止をきちんと継続すれば、緊急事態宣言のような非常手段を使わずとも、感染防止は可能だと思います。

今回の学校再開は、ウイルスとの共存の始まりです。よく、3月下旬の3連休時の気の緩みが反省点として報道されますが、あの時は、私たちは何となく、「自粛が終わった」「昔の生活に戻った」と思っていました。今、私達にそのような緩みがないか省みる必要があるでしょう。

ウイルスから解放されたのではないという事実は辛いことですが、私達は絶望の牢獄にいるのではないのです。うまくつきあえば、私達は私たちの学校だけでなく、私達の社会を守ることができます。

口川村孝先生の提言

山中伸弥教授のHPには、川村孝先生の提言も紹介されています。先生は京都大学健康科学センターの教授をされていた方で、新型コロナウイルスの勢いが一段落した段階で、今後の対策に向けて考察されていますので紹介します。

必要な衛生行動は下記の2×2表(人と物への接し方)がすべてです。

移動や営業の自粛はそのための方便に過ぎません。しかし世の中は本末転倒になっているように思われます。表に記載した予防策が徹底されれば、移動や営業、集会や娯楽は禁じられるべきではありません。

また、標語として面白い「3密」ばかりが強調され、「物を介した感染fomite transmission」に対する注意がおろそかになっているように感じられます。クルーズ船内の残留ウイルス遺伝子検査の結果や経路が追えない症例の多発もその傍証です。自宅に籠もっていても避けられない食料品の買い出しや宅配物・回覧板で感染する可能性もあります。物の消毒には、アルコールや

次亜塩素酸のほか、熱風や紫外線も有効です。

	一次予防(未然防止)	二次予防(早期対応)
人	常にマスクを着用する マスクをした人からは1m離れる マスクをしていない人とは2m離れる (Mask and Distance)	手と顔を石鹸・洗剤で洗う 手が洗えないときはアルコールで消毒 (Washing/Sterilization)
物	人が触った物には触らない (Non-contact)	人が触った物は洗浄・消毒する 水気が使えない物は熱風で滅菌する (Washing/Sterilization)

川村先生は、今後の社会活動推進のために大切な指摘をしています。「予防策が徹底されれば、移動や娯楽、集会は禁じられるべきではない」のです。

また、「標語として面白い『3密』ばかりが強調され、『物を介した感染』に対する注意がおろそかになっている。」という指摘があります。標語とは、「主張・信条や行動の目標、指示内容などを分かりやすく簡潔に言い表した語句」(大辞泉)です。本来の意味に何の問題もありませんが、「標語」を比喩的に使うと、文学では、「新鮮味の無い、型にはまった」「中身が平凡な」というニュアンスを帯びることがあります。新型コロナ対策の鍵になる言葉が、形骸化したら意味がありません。

今回の「新しい生活様式」という言葉も、何のための「新しい生活様式」なのかということを常に意識する必要があります。「新しい生活様式」は皆さんの命を守るためであり、他者の命を守るためです。同時に、感染の発生を抑えながら社会や経済、教育を守るためです。「新しい生活様式」は、ボクシングで言えば、しっかりとした防御です。防御を完璧にし、ウイルスのパンチをかわしつつ、確実にジャブを打ち続け、少しずつポイントを稼ぐのです。健康を守ることと、社会を回していくことの両面を見据え、両者のバランスを取りながら、最終的には人類のKO勝ちに持ち込みたいものです。

口多くの人の支えに感謝

今回、クラスに物品消毒用の消毒スプレー(次亜塩素酸)が配られました。(担任の先生が管理しています)これは、本校の卒業生(18回生)が宮崎西高校のために無償で50本も寄贈してくれたものです。私がお礼の電話をかけたところ、本校に恩返しをしたいので使って欲しいということでした。(在学時は野球部だったそうです。)ありがたく使わせていただきます。皆さんも、環境保健部からの使用上の注意を良く守り、物品等の消毒に活用してください。

皆さんの知らないところで、私たちは多くの人に支えられています。皆さんの学びは、皆さんの保護者をはじめ、社会の多くの人の支えでなっています。昔のような生活を100%取り戻すことはしばらくは難しいでしょう。しかし、このコロナ危機を通して、新たな考え方や感受性を120%身につけることができれば、トータルでは皆さんの成長になります。そして、皆さんの成長は社会の進化につながります。夏のマスクは暑くて不愉快ですが、お互いがんばりましょう。